

水曜日研

ウォークラリー

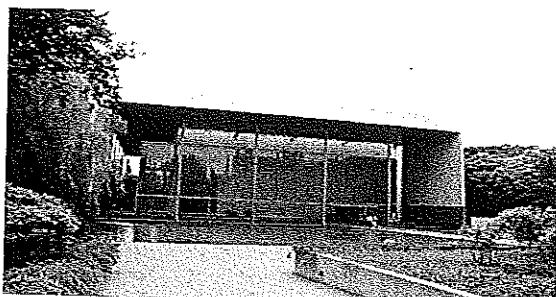
10N1114 藤城裕介

今回、私は国立西洋美術館・法隆寺宝物館・国際こども図書館を訪れました。東京と言ったら建物が密集しているというイメージが強いけれど、今回のウォークラリーを通して自然に満ちた場所もあり驚きました。



初めに、国立西洋美術館は、松方コレクションに加えてルネサンス期より20世紀初頭までの西洋絵画・彫刻作品を常設展示している。なかでも、西洋のオールド・マスターたちの作品を見ることができる美術館である。免震レトロフィット工事を行った建物で、作品の価値を尊重しているのが感じられます。

また、この建物入り口近くの地面や前庭の彫刻にも免震台を設置するなど地震対策に力を入れているように思いました。

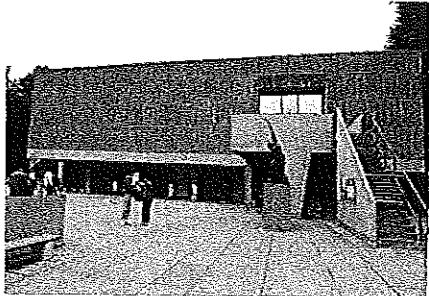


次に法隆寺宝物館は、緑に囲まれ、人工池が施されていてとても落ち着いた感じでした。明治11年に奈良の法隆寺から皇室に献納された大陸渡来や飛鳥時代の仏像や仏具などを保管している。法隆寺宝物館は谷口吉生の設計戸ということで、建物の中をみて感じた事が床にある線が必ず柱の中心であったり窓の縁とつながっていたりですごく細かいところまで考えていて感動しました。

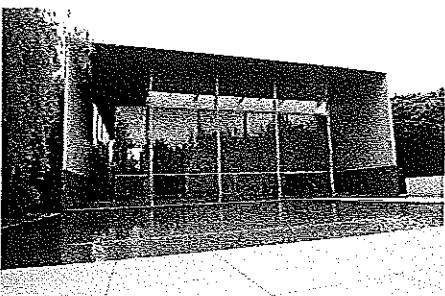
ウォークラリー

10n1115細谷 究

私たち、長瀬ゼミは5月29日のウォークラリーにおいて上野周辺の有名な建築物を見て回りました。



最初に世界的に有名である建築界の巨匠のル・コルビュジエが作り世界遺産登録もあともう少しと言われている国立西洋美術館をみた。この建物を見て驚かされたのはピロティ（支柱）によって二階が浮かされているので二階の空間を自由に使えるということです、また水平横長の窓により室内は明るく開放的になっていました。また、コルビュジエが使った家具（スチールパイプによるソファー）の寝心地にも感動しました。



次に谷口吉生が設計した（法隆寺宝物館）を見たこの建物は先に見たものと全然違い、金属、石、が作る冷たさに加えてガラスと水の透明性がすごく美しかったです、一方、光りに満たされたエントランスが暗い展示室とは鋭い対称が素晴らしいかったです。

最後に見に行ったのは、国際こども図書館です国際こども図書館は安藤忠雄が作った建物でレンガなどを多用している図依存部分にガラスと鉄骨によるボックスが挿入されている、風格と近代性を併せ持つ見覚えのある建造物であり、新旧の部分が衝突する空間イメージが追求されていました、また中にあった円形の図書館が忘れられません。

2010年5月29日 法政大学デザイン工学部建築学科
永瀬ゼミウォークラリー（上野コース） 感想レポート

10N1116 牧野 茜

私は永瀬先生と共にウォークラリーとして東京・上野を巡ってきました。

最初に訪れたのは、世界遺産登録ももう間近である建築界の巨匠と呼ばれる※ル・コルビュジエが設計し、世界的にも大変高い評価を受けている作品が上野にある国立西洋美術館です。

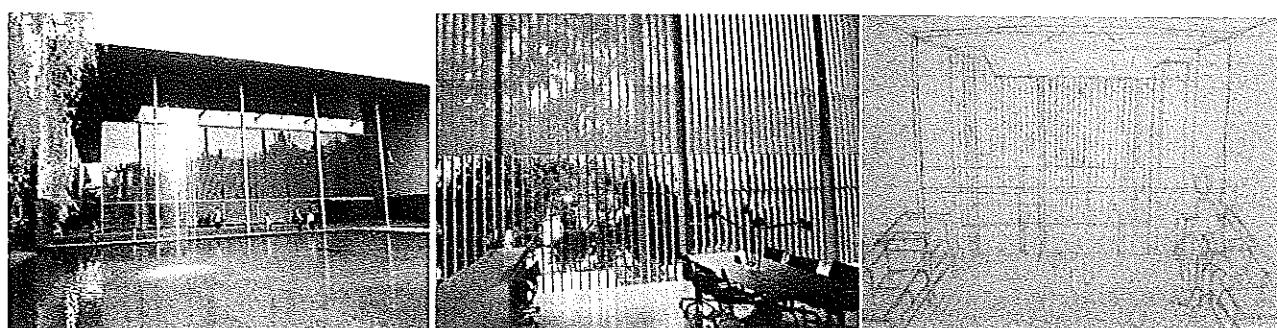
ここにはル・コルビュジエが考えた当時の最先端デザインのイスがあり、実際に腰掛けることができました。先生曰く、普通はなかなか座る機会がないとのことでしたので貴重な体験ができよかったです。また国立西洋美術館は日本初の免震レトロフィットを採用しています。この免震部材を採用することにより、オリジナルデザインを損なうことなく、建物と美術品の安全性の確保が図られるようになったそうです。



※ル・コルビュジエ

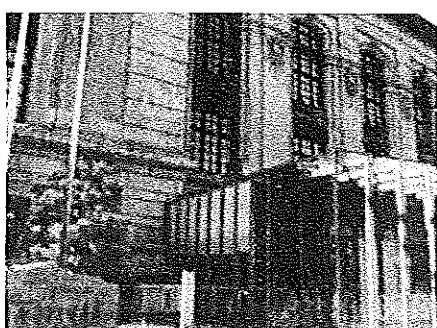
20世紀最大の建築家で、家具のデザインはもとより絵画や彫刻、都市計画など幅広い分野において多彩な才能を發揮し、多くのデザイナーに影響を与えた。

次に向かったのは、谷口吉生が設計した東京国立博物館法隆寺宝物館です。エントランスはガラス張りで光を取り入れやすくなっているのに対して、展示室はとても暗くて印象に残りました。ここでは時間をとりスケッチを行いました。自分の気に入った場所を描いていいとのことでしたが、描きたい場所が多くあったので悩みました。



最後は国際こども図書館です。この図書館は安藤忠雄が昭和初期に建設され未完成となっていた建物を、児童図書館用の図書館に再生しました。その際に内外装の意匠・構造を最大限に保存し歴史的建造物の保存と再生を考えつつ、大規模な地震にも耐えられるよう免震工法を採用しています。内装もとても綺麗で、私が子供だったら喜んでこの図書館で通い詰めると思います。

まとめ



ウォークラリーを通じて建築についてより興味を抱き、先生やOBの方からお話を伺ったことで知識が深められたのではないかと思います。ですが、私は今まで建築について学んだことがなく、お話を伺いつつも知識の無さを再認識しました。また、スケッチも不慣れで自分の見たこと・感じたことを表現することができず、技量の無さを感じました。これらのことから、これからは積極的にどんどん建築に関する学んでいきたいと強く思いました。

ウォークラリーの感想

10n1117 益井悠吾(永瀬ゼミ)

私は今回のウォークラリーで上野にある国立西洋美術館、東京国立博物館法隆寺宝物館、国際こども図書館の3つの建物を見てきた。

国立西洋美術館とは建築界の巨匠ル・コルビュジエの日本にある唯一の作品である。コルビュジエは鉄筋コンクリートを使った建築で先駆的な役割を担った建築家であり、この国立西洋美術館も鉄筋コンクリートで作られている。時間がなくあまり中を見ることは出来なかったが、地下からは免震構造の柱を見ることができ、とてもいい経験になった。

次に東京国立博物館法隆寺宝物館は、遠目から外観を見ると水辺に浮かんでいる様に見えてとても美しく、そのように見せるために様々な工夫がなされている。水辺の真ん中に博物館に繋がる通路があり、柵は水辺の中に打ち込まれていて通路と水辺の境目を感じさせない作りになっている。また私が特に気になったところは入口の作りである。ただ単に建物本体に自動ドアを付けるのではなく、本館とは別の入口の空間がありそこを1回通ってから中に入らなければならない。そしてその入口の空間は建物の大きさと比べると天井も低く明らかに小さく、なぜそのような作りになっているのかO Bの方にお聞きしたら、どのような小さな入口の空間を通ってから博物館に入らせることによって、より博物館の大きさや解放感を感じさせることが出来るという設計者の意図であるということを教えていただいた。

最後に国際こども図書館は、公園内にある国立国会図書館支部上野図書館の改造計画であり、昭和初期に建設され、未完となっていた建物を児童図書館として再生している。レンガを多用したルネサンス様式による歴史的建造物を既存部分にガラスと鉄骨による抽象的なボックスが挿入されることで、明治、昭和、平成の三時代が一体となった不思議な空間ができあがっている。今回スケッチの課題があり、私は元々外観部分だったレンガの壁にガラスと鉄骨により補整されている廊下をスケッチした。この廊下を選んだ理由は三時代が一体となっているのを一番感じる事が出来る空間であるからだ。

私は今回のウォークラリーで、自分で足を運んで生で建築に触れる大切さを感じた。直接見なければ分からないその場の空気や建物の美しさを感じることが出来た。またO Bの現役建築士の方のいろいろなお話を聞くことができたり、自分で建物をじっくり見ながらスケッチをしたりなど、普段ではあまり出来ない経験をすることができた。この経験を生かして今後もなるべく自分でたくさんの建築を見に行こうと思う。

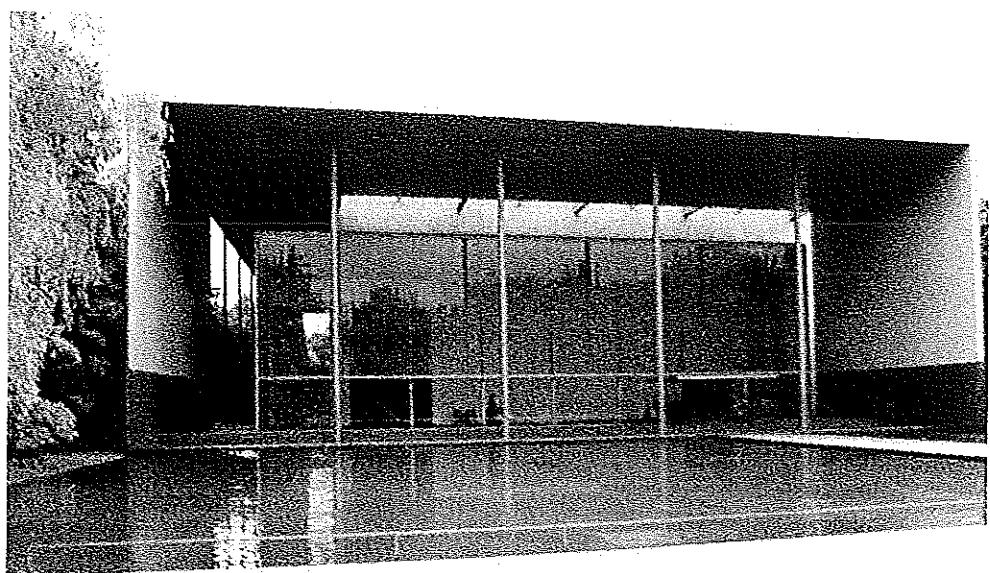
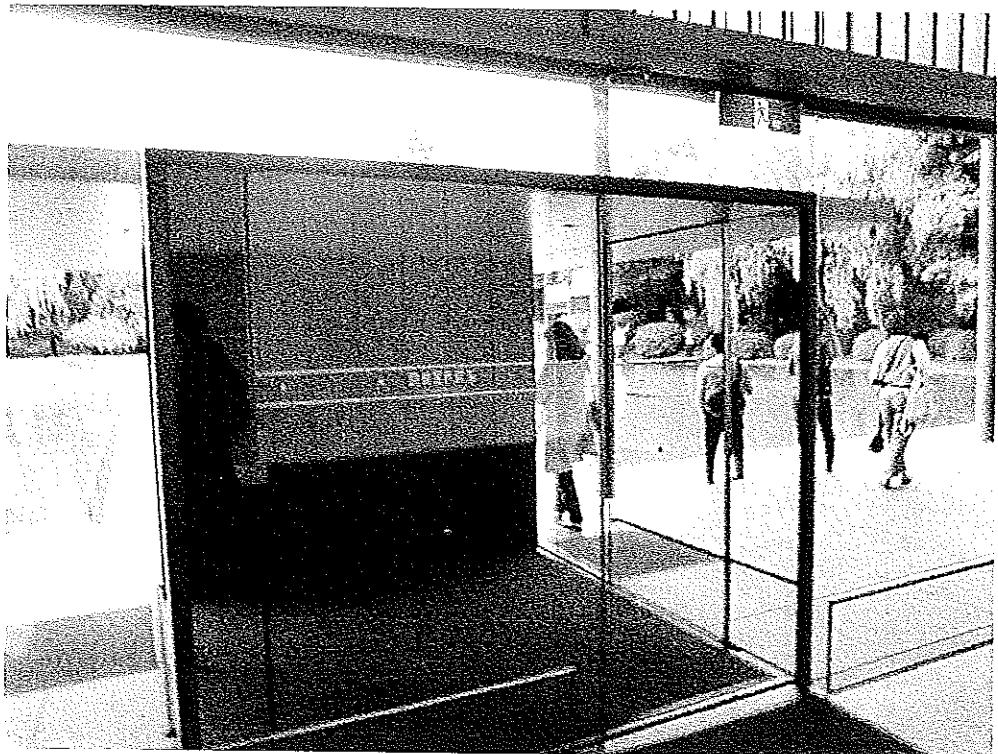
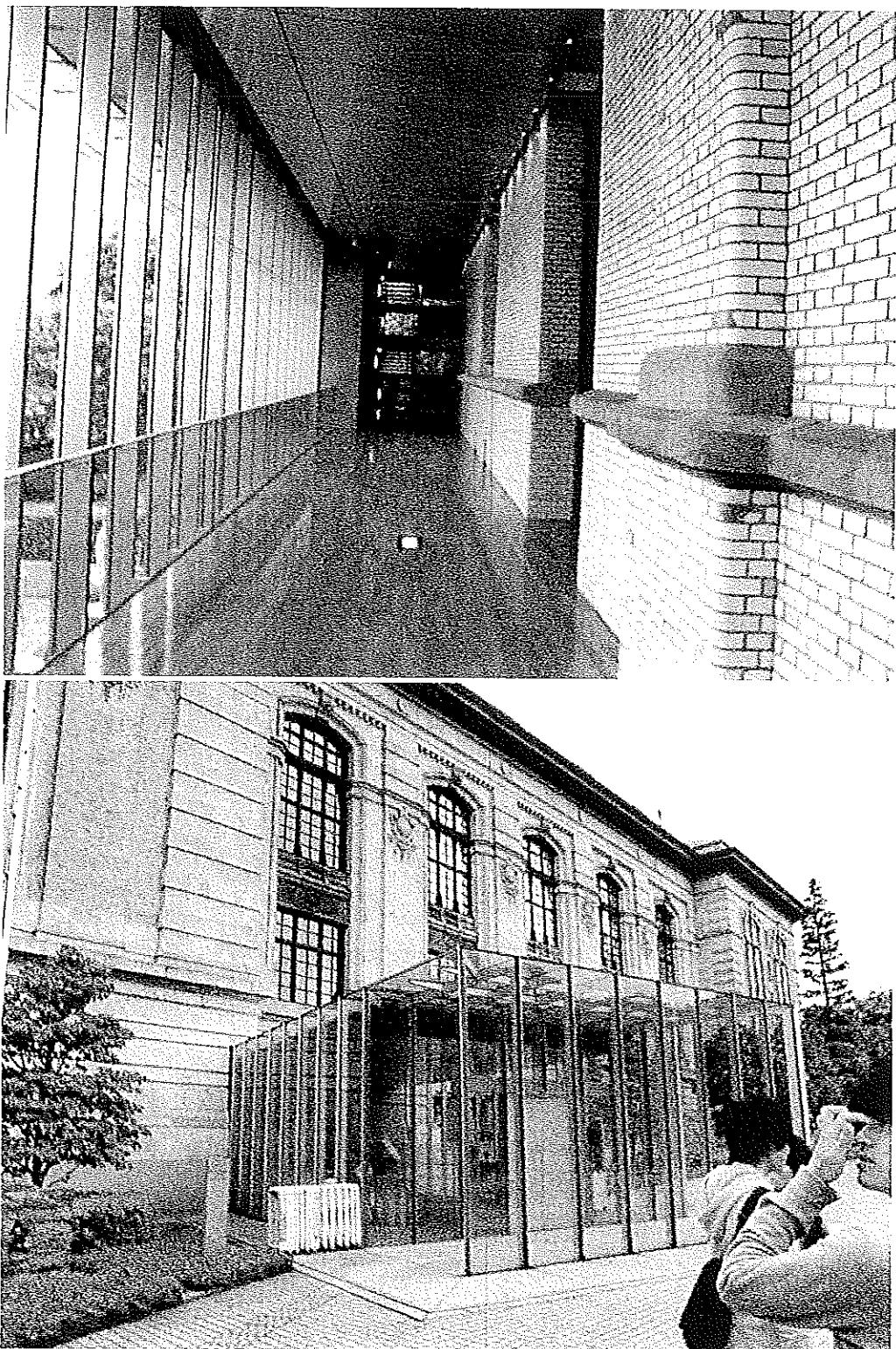


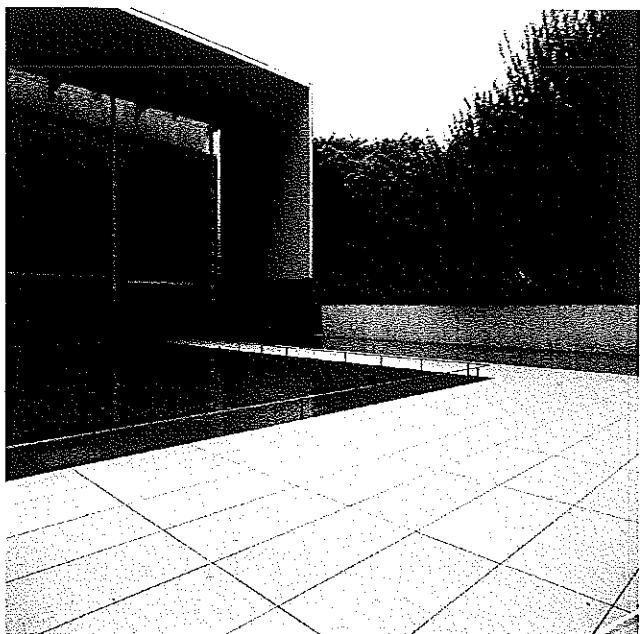
Figure 1. A photograph of a modern building with a dark facade and large windows. The building is set back from a paved area, and there are some low walls or planters in front. The sky is overcast.





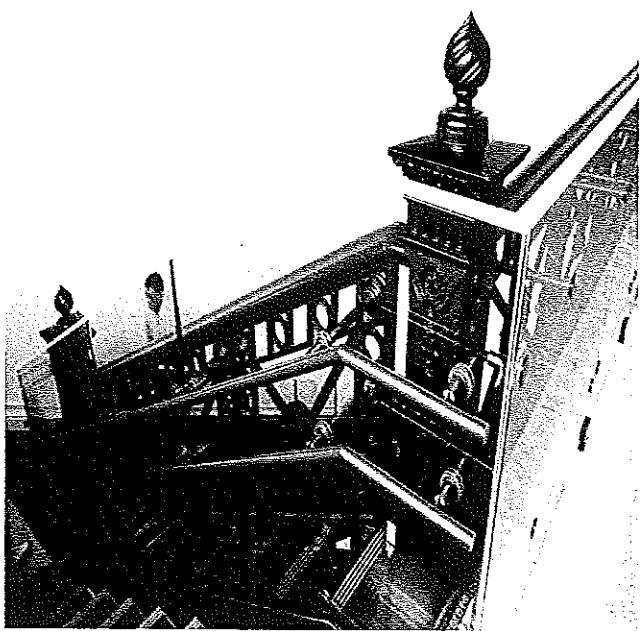
永瀬ゼミ・ウォークラリーレポート

・法隆寺宝物館



足場と水の境界に仕切りが無いのと、手すりのようなものが水の中にあることで、まるで自分が水の上を歩いているような感覚になった。足場のタイルがきっちりキレイに並べてあるのが珍しいと思った。入り口の部分の天井を低くすることによって、中に入ったとき、とても広く感じるということに気づいた。とても自然とマッチした建物だと思った。

・国際子供図書館



今と昔が一緒にそこにあるような建物だった。不自然な感じは一切なく元々この設計で造られたみたいだった。この写真は、階段の手すりの内側をガラスの壁で覆っている。これはこういうデザインというわけではなくて、法律の問題でこうせざるおえなかった。それにしてもよく合っていると思った。

・感想

付き添いのおじさんがたくさん説明してくれたので、とてもわかりやすく理解してまわることができた。

10N1118 松下周平

ウォークラリーを終えて

建築学科1年 10n 1119 松葉理美

見学場所：上野 1 東京国立博物館法隆寺宝物館

2 法隆寺宝物館

3 国立西洋美術館（外観のみ）

私が最も興味を持った建築物は一番はじめに行った法隆寺宝物館の外観です。

今はそこを往かなくなってしまったので書きたいと思います。

この建物の設計者は谷口吉生さんで施工は1999年3月、今は博物館として使われています。

敷地内に入り、少し幅の狭い道を通ると目の前にはまず大きな噴水があり、道が開けたところでこの博物館を正面から見渡すことができます

そこには階段が二段になっていて、その端には手すりがついていました

石畳でできた床面の端にはふつう、一枚一枚の石を並べたときに多少のずれができ、はみ出したりすることを目立たなくするために1本の棒状の枠などを付けるのですが、ここにはそれがあまりません。

これは、水面との境目がないように見せらるためです

しかし、天井が水に向いているように見えるために正面が石畳の床のようまで入り込むように設計されていました

そして、この道と水の境目には手すりのような棒が続いているが、これはとても細く、寄りかかることもできません。

しかしそく見るとこの棒は水の中から立っていて、手すりや柵の役割は全く果たしていないのです。

このようにわざと寄りかかったりつかまつたりしようとする人がいたいようにデザインしたことで安全面を問われたりする場合も結構あります

建物は正面が大きなガラスの壁になっており、そこには格子状の鉄の棒が縦にはめ込まれています。

その一本一本の幅はとてもせまく、この建物のように壁一面に一本の鉄骨を長くとることできれいに見えるバランスが保たれています

同時に水に沿された低い位置に立ち體物に遊び、てぬる上、まさに壁を蹴り倒すような構造においています。壁と床の境目にも線は入っていないくて、2辺それぞれの石畳の隙間がまっすぐにつながり、また、床には何箇所か、4枚の石畳の角の交わったところにぴったりと丸いライトが埋め込まれていました。

ここには出入り口から階段状に降りてくるため、水との境目は先ほどのように水が入り込んでいるのではなく、水面と床が階段状のように区切られています。

入口の自動ドアを動かす装置は天井にも床にも見当たらず、どこか見えないところにうめこまれていて、一つ目のドアを入れると手が届くほど天井が低く、もう一つのドアを抜けると2階まで吹き抜けの天井になっていることでより解放感を強調していました。

一方近くでは階段、壁からのままで延長して外の壁にかけていました。

このあと、国際こども図書館で昭和初期に建設された歴史的建造物の既存部分にガラスと鉄骨による現代の時代が一体となっている部分をスケッチしました。

最後に、ル・コルビュジエの設計した国立西洋美術館を少し見学しました。

3つの建築物を見て、それぞれ特徴や用途は様々でしたが、これらを建築という目線から見て多くのことを発見しました。

いままで美術館に行っても展示物や内装ばかりを見ていたために気付かなかつたことがたくさんあって、今回ひとつひとつ丁寧に見ると、建築そのものの構造や、デザインが面白いものばかりでした。

ウォークラリー 感想

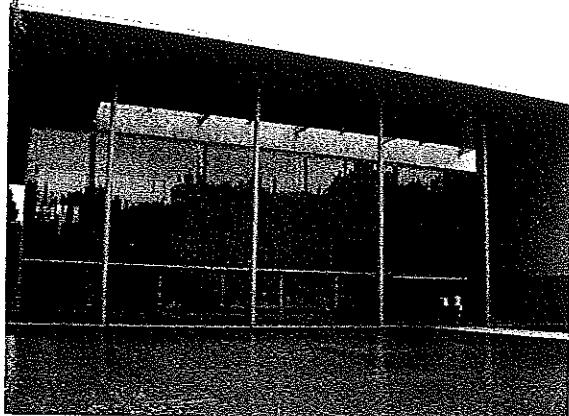
10N1120 丸本健悟 永瀬ゼミナール

・国際子ども図書館



自分的には少し違和感がありました。見ていて落ちつかない気もしたので、あまり好きではありませんでした。もう少し増築前の風情を生かした方がいいような気がしました。

・法隆寺宝物館



ることに斬新さを感じ、雨天時の屋根上の雨水のながれ方はどうなっているのか興味があります。屋根の下に別の屋根があるデザインも面白いと思いました。内部ですが、正面から見える空間内の落ち着きは気に入りました。ルーバーをどこでなくすか、柱の素材と本数はどうするかなど細かい部分を意識しているように感じました。

・国立西洋美術館

最後に訪れたのは西洋美術館です。この建物は基本設計を、ル・コルビュジエ、実施設計を前川國男、坂倉準三、吉坂隆正が担当して建てたもので、一説によるとコルビュジエはこの作品を気に入っていたようです。私は設計の斬新さが少しもの足りないような印象を受けました。しかしながらディテイルに力を入れたとも考えられるし、一概につまらない作品とは言えないと思いました。

今回のウォークラリーで最初に訪れたのは左写真の国際子ども図書館です。ガラスで作られている部分が増築した部分で、これの設計を担当したのは安藤忠雄 教授です。素材がガラスで作られたものは表情が出にくいというお話を同行してくださった教授方が教えてくださったのですが、まだまだ素人なのでよくはわかりませんでした。

増築前の建物とのガラスの相性を考えると

次に訪れたのは谷口吉生設計の法隆寺宝物館です。この建物の反対側には谷口吉生の父、谷口吉郎設計の建物もあり、親子二代が設計した建物が同じ敷地内に存在している数少ない場所のひとつです。そういうところも面白いと思ったのですが、法隆寺宝物館のデザイン性に関しても非常に面白みを感じました。見たときにまず目に留まったのは屋根の部分です。まっ平らである

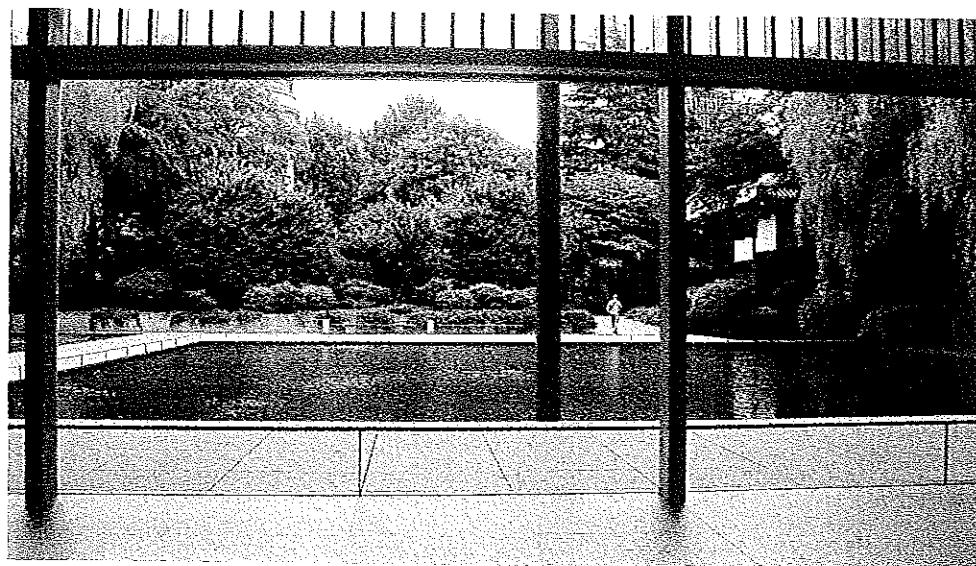
永瀬先生ゼミ 上野ウォークラリー

10n1121 三ツ野 元貴

国際子供図書館→ レンガのようなレトロな雰囲気とガラス張りのモダンな雰囲気の融合した建築物でした。安藤忠雄先生が手直しした作品とOBの方々がおっしゃっていた。地下の免震工事も行つたらしいが、見た目はあまり自分の好みではなかった。というのも、昔ながらのレトロな雰囲気を感じにくくするほどガラス張りの玄関が飛び出していたからです。



法隆寺宝物展 → 水とガラス張りの調和が見事な建築でした。また、中にあるイスもすわり心地抜群・階段の手すりが気持ちよい、とうまく設計されていたと思いました。ただ、景色に柱が入ってしまうのが嫌だった。



ウォークラリーレポート

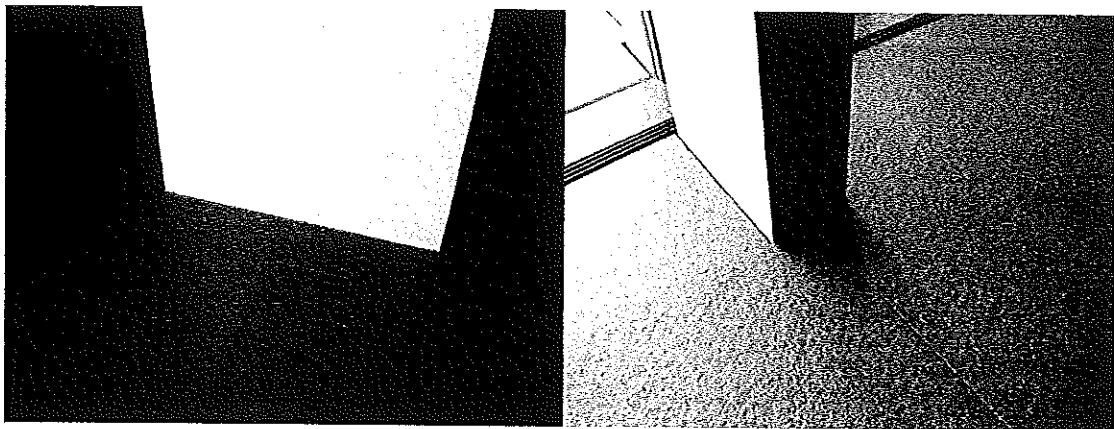
永瀬ゼミ 10N1122 富尾晃平

・国際子ども図書館

未完であった建物を図書館として再利用したものということで、古めかしい外観である。建物全体すでに目を惹く存在であるが、その中でも特に目を惹くのが入り口に設置されたガラス製のボックスである。私の目からすれば明らかに異質であったが、新旧の部分を融合した新しい空間を作り出しているようだ。賛否両論あるようだが、私からすればどう見てもガラスの部分が浮いている感じがした。後付け感が拭いきれていないというのがその原因かと思われる。平成と昭和の融合、新旧の調和、面白いテーマだとは思うが、違和感なくそれを実現するのはなかなか難しいのではないか。

・東京国立博物館法隆寺宝物館

こちらも目を惹くデザインであった。森緑がひらけたところでまず目に入る水面。そして目を上げると特徴的な縦ルーバー。自然の中にあってもあくまで主張しないデザインで、うまく馴染んでいるように思われた。異質は異質なのだが、建物としての存在感と自然との調和の双方の兼ね合いがうまくとれているのだと感じた。晴れた日にもう一度訪れたいと思った。内部では、教授の指摘で気づいたことだが、実に几帳面な設計がされていた。下の写真を見てわかるように、床面のつなぎ目が柱の中心を通るように計算されている。全ての柱に対してこの細工が施されている。ここまでやるかとは感じたが、やるからには徹底的にという意識には尊敬の念を抱かされた。



・国立西洋美術館

教授によると、西洋美術館が完成した際、ル・コルビジェ本人はあまり良い評価を下さなかつたようである。残念ながら、私としてもこの建物の良さがいまひとつ分からなかつた。これから4年間建築を学ぶことで分かるようになるのだろうか。外観を崩さずに免震装置を施されており、それは建物だけでなく周囲にある彫像にも免震のための台座が設置されている。水面下でこういった細工が施されているというのは抜かりなさを感じた。

私事であるが、運良くフランク・プラングィンの作品展を見ることができた。デッサンを描く位置を決めていたところ、おばあさんに話しかけられ、チケットが余っているというので有り難く頂いた。時間が限られていたので急ぎ足であつたが、自分にとって確実にプラスに働いた。純粹な感動に包まれ、こういう展示会には積極的に足を運びたいと思った。

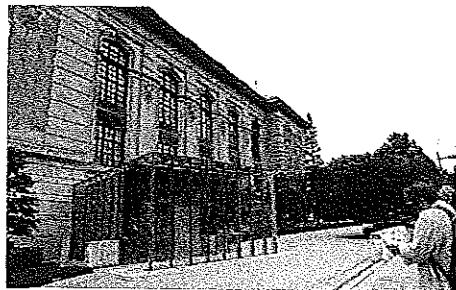
印象としては、暗い配色が多かったように感じた。時間さえあれば、もっとじっくりと見たかった。

2010.05.29 ウォークラリーについて

10N1123 宮崎千尋

私が所属する永瀬先生の導入ゼミでは、上野周辺の主に3点の建築物を重点的にみてまわった。これからその3点の建築物について、考察したいと思う。

国際こども図書館



概要国際こども図書館の前身は帝国図書館である。

1980年代に蔵書の増大により、関西に新しい国立図書館の建設が決定し、その際、ここ上野にある図書館のあり方が考えられた。当時、子どもの本離れが深刻な問題として取り上げられるようになっていた。そこにおいて、国立の児童書専門図書館が求められており、今日の上野の図書館となった。この建築物の前身である帝国図書館は、ルネサンス様式をとりいれた明治期洋風建築の代表作のひとつである。国際こども図書館に転用されるに至り、安藤忠雄が設計を務めた。

考察と感想この建築物を見たとき、近現代をおりませている面白い建築物だと感じた。明治期洋風建築に、現代のガラス張りのドアがついている建物でした。ふたつの時代を交差しながら、それがしっかりと組み合わさっており、見ていてとても圧倒された。煉瓦が時を経て、少しずつ色が変化している様は、建築物に歴史の奥深さを与えてくれているように感じ、ガラスは時を経ても変わらない、現代の現状維持を感じた。この頃は、新しい建築物をたてていくことに気をとられて、昔の重要な建築物などから疎遠になっていたところがあるとおもう。その中で、今回は児童書専用図書館として、生まれ変わりながら、明治期のよさを残したこの建築物は素晴らしいと思った。

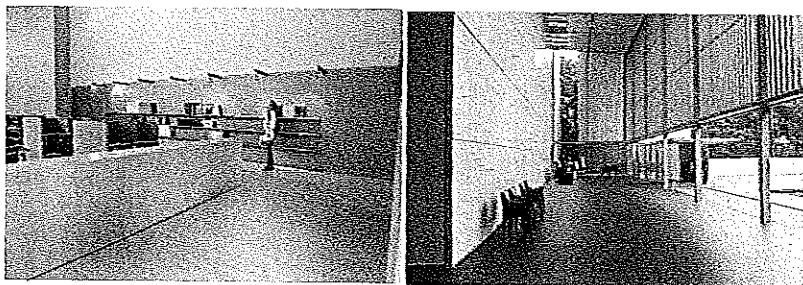
法隆寺宝物館



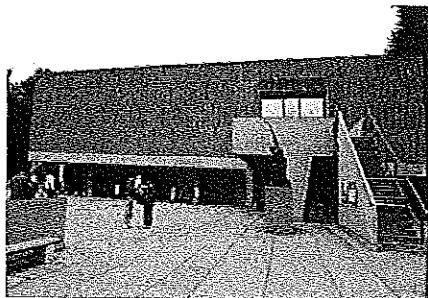
概要法隆寺から皇室へ送られた宝物を保存展示するためにつくられた建築物である。設計は谷口吉生であり、同じ法隆寺内に父・谷口吉郎の作がある。

考察や感想まずこの建築物までの道のりのアプローチがとても印象的だった。林のような小道をのんびりと歩いて行くと、ぱっと視界が開けてこの建築物にたどりつき、とてもきれいだとおもった。O Bの方と話していて、ガラス張りの建物は表情

がない、空虚な作品になりやすいが、これはまわりのコンクリートと上手く交わっていて、すばらしいと思った。中に入っても、外を見渡せる窓も、どこまでつくるか、見せられるようにするか、どのような見せ方がいいか、光のとりかたはどこからかなど事細かにいろいろ教えていただき、この建築物についてすごく興味をかきたてられた。また、面白い話ではあるが、この建物が建てられたのは1999年で、阪神大震災をすぎて、ちょうど建築法が改正されたところだったが、この設計自体は1995年に認可をうけたもので、耐震に対する技術はもっていなかった。だからこそ、今ではできない造り、窓の取り方、柱の建て方などがあり、機会があればもう一度いきたいとおもっている。



国立西洋美術館



概要西洋美術館は19世紀から20世紀の絵画や彫刻などの松方コレクションを集めて展示するためにつくられた。設計自体はル・コルビュジエが行ったが、本人が日本に来日できなかつたので、実施設計は弟子の前川國男、板倉準三、吉阪隆生が合同で行った。また、免振工事を行っており、地下で一般公開されている。

考察と感想

まず西洋美術館に入ってすぐに見たのは、免振工事をした一般公開されたところでした。中は何度か訪れていて知っていたのですが、これが一般公開されているのは知らないて、見て説明をよんでも理解し、この工事は行うのがすごく大変だっただろうと思いました。また、ここではスケッチを行ったので、じっと建築物を見つめて考えて手を動かして書く。ということを行いました。あまりうまく書けなかつたけど、詳細をしっかりと見て考えということができてよかったです。

今回のウォークラリーでは上野を回り、どのようにして建築物を見るといいか、建築物を見るこの楽しさをしました。これから活動的に自分でもいろいろなところを訪れ、よい建築物に触れていきたいと思いました。